



『トクシマ・アンツァイガー』

第 22 号

徳島 1915 年 8 月 29 日

ポーランド（続き）

今、ヨーロッパには全部で 1,500 万人以上のポーランド人がいる。そのうち 800 万人以上はロシアに、420 万人はオーストリア・ハンガリーに、308 万 7 千人はドイツにいる。ポーランド人が大多数を占める諸地域は、地図を見ればわかるように、かなり一所にまとまっている。もっとも、どの地域においてもポーランド系の人々の中になんか多量の他の人種が入り込んでいる。例えばロシア領ポーランドには、800 万人のポーランド人と並んで 410 万人の非ポーランド人が居住している。ポーランド問題を十分に理解するためには、さまざまな出来事の成り行きにもちょっとした歴史的概観をおこなう必要がある。民族大移動のあいだに、ヴァイクセル [ヴィスワ] 川の東西の、ゲルマン人が去った諸地域にポーランド人が定着し、そこに独立国家を建てた。すでにカール大帝のもとで、この諸地域をドイ

ツ人のために取り戻そうとする努力が始まった。ここではただ、ドイツ騎士団とアスカニア家の諸々の戦いを想起してもらいたい¹。

大選帝侯²は、プロイセン公国（今日の東プロイセンにあった。）を、決定的にドイツ系の国に戻すことに成功した。

18世紀には、ポーランドの玉座にあったドイツの君主がいる（ザクセンのアウグスト二世とフリードリヒ・アウグスト三世）。ポーランドの政治状況はつねに混乱していたが、これは、かつてのポーランドのような選立王制国家ではよくあることだ。選ばれて統治をおこなう君主は名目上の国家元首でしかなく、国の事実上の主人は貴族たちであった。彼らはほしいままに支配をおこない、とりわけ自分たちの農奴を途方もないきびしさで抑圧した。国家経営の失敗により、ついに近隣諸国は介入の糸口を得たと考えるに至り、ロシア、オーストリア、プロイセンに接したポーランド領の第一次分割に関与することになった。当時のポーランド王国は、面積と人口ではヨーロッパ最大の国家のひとつであり、東はドヴィナ川とドニエプル川に、西はほとんどオーデル川に、南はドニエストル川に、北はバルト海にまで達していた。1795年、ポーランドの最後の分割がおこなわれ、プロイセンは、ワルシャワを含むブク川までのポーランドの諸地域を得た。しかし、ナポレオン戦争によって、プロイセンは一かえってよかったと言ってもよいだろうが一ロシア寄りのポーランドの大きな部分を失った。プロイセンにとって最も重要で何としても不可欠な部分である今日の西プロイセンとポーランドはプロイセンにとどまり、東部国境はそれ以来変わっていない。西プロイセンについては、中世の初期までドイツ人の領土であったものを取り戻したにすぎない。そしてこの地域は、東プロイセンとそれ

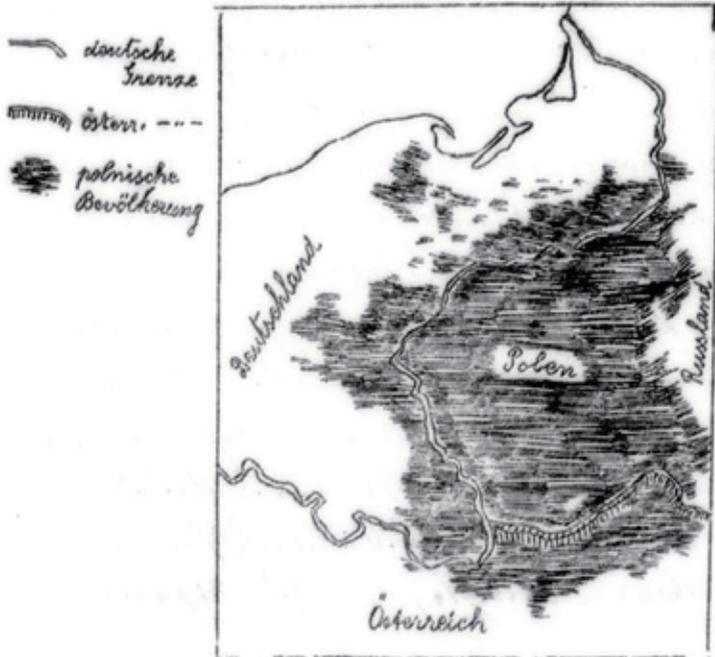
1 ドイツ騎士団は十字軍を契機に作られた修道騎士団で、1226年から1525年まで、東プロイセンを治め、アスカニア家は1134年から1320年までブランデンブルク辺境伯領の君主。いずれもスラヴ系の民族と戦ったが、前者は1466年にポーランドに臣従した。

2 ブランデンブルク辺境伯フリードリヒ・ヴィルヘルム（1620-1688、在位1640 - 1688）。ブランデンブルクの勢力を拡大した。

以外のプロイセン領を連結するためにどうしても必要なのである³。プロイセンにはポーランドが必要だが、それはベルリンを守り、東方に対する国境防備能力を高めるためであり、シュレージエンを東プロイセン・西プロイセンと緊密に結合するためである。

ロシアのポーランド政策には、この北方の帝国のバルカン政策の一部がかいま見られるであろうが、この政策は現在の戦争で大きな役割を果たしている。

オーストリアがポーランドのいくつかの部分を獲得した目的は、おそらく隣国ロシアの度を越した膨張を妨げることだけだったろう。



3 東プロイセンはドイツ本国から見ればバルト海沿いの飛び地であり、そこに至るまでのポーランドの土地（西プロイセン）の獲得によって、プロイセン王国の東部は地続きの領土となる。

日本の歴史（20）

やがてロシアは旅順に対するさまざまなもくろみを実現した。1894年、旅順を含む遼東半島南西部を租借し、シベリア鉄道を延長して満州を経由して牛莊、大連、旅順へと至る鉄道の權益を得た。1900年の中国における混乱により、ロシアは満州鉄道に沿って強力な軍を配置する好機を得た。日本も同様に義和団の鎮圧に参加していた。北京の各国公使館のすみやかな救援は、山口将軍指揮下の第五師団のすばやい派遣のためでもあったが、日本はこの軍事行動から政治的利益をほとんど獲得できていなかった。満州におけるロシアの進出は、朝鮮をも脅かしており、日本の懸念を掻き立てずにはいなかった。日本はまずイギリスと同盟の合意に達して、中国と朝鮮の独立を維持し、いずれかが二つの大国に攻撃された場合には相互に支援し合うことにした(1902年)。この条約を後ろ盾に、日本は今やロシアに軍を満州から撤退させるよう要求しはじめた。しかしロシアは、東方への拡大をなおもめざしていたので、これに同意することはできなかった。交渉は何ヶ月にも及んだ。その間、ロシアは満州における軍を強化した。1904年2月6日、日本はついにロシアに最後通牒を突きつけ、2月10日には宣戦を布告した。すでに2月9日の夜、日本軍は旅順港内のロシア艦隊に水雷艇による攻撃をおこない、そのさい3隻の軍艦に損傷を与えていた。同時に二個連隊が済物浦⁴付近に上陸したのちソウルに向かって進軍していた。済物浦港に封じ込められた2隻のロシア軍艦は、ロシア人自身の手によって沈められた。東郷提督指揮下の日本艦隊は、旅順港の前面にとどまって数隻の古い汽船を沈め、機雷を敷設することでロシア艦隊を封鎖しようと試みた。マカロフ提督指揮のロシア艦隊は一度だけ突破を企てたが、攻撃しようと待ち構えていた日本艦隊に出くわし、反転した。ロシアの旗艦が機雷に触れ、マカロフ提督とともに沈み、二隻目の装甲艦も機雷によって損傷した。そうこうする間に、日本の増援部隊がソウルに入城

4 現在の仁川

していた。朝鮮の皇帝は日本と同盟を結び、戦争が続く間自国の裁量権を日本人にゆだねた。黒木将軍指揮下の日本軍は、朝鮮と中国の国境の川、鴨緑江に向かった。ここで彼らはロシア軍と衝突し、敵を撃退して勝利を収めた。鴨緑江の戦いからまもなく、多くの日本軍部隊が旅順の近くで遼東半島に上陸し、旅順要塞を攻撃しようとした。ロシア軍は、この日本軍の進軍に対して金州で激しく抵抗したが、結局日本軍による攻撃の成功後、退却せざるをえなかった。ロシア主力軍の一部隊が、旅順要塞救援のために差し向けられた。日本軍は、この救援軍を迎え撃ち、得利寺付近の戦いにより撃退した。こうして旅順攻囲戦が始まった。

つづく

1914年11月1日のコロネル沖海戦に関する シュペー伯爵の報告（続）

これに対し、わが方の二隻の装甲巡洋艦の砲は完全に使用可能で、射撃も上々であった。すでに6時39分には、「グッド・ホープ」に最初の命中弾がみとめられた。その後すぐに私は艦隊を縦陣に直させた。イギリス艦隊は、このときようやく砲撃を始めた。荒れた海は、われわれよりも彼らにとって厄介だったと思う。敵の二隻の装甲巡洋艦は、だいたいのところ、距離が縮まりながら日が暮れていったときも、われわれの砲火に捕えられつづけた。一方これらの敵艦の方では、これまで確認されたかぎりでは、「シャルンホルスト」に二発、「グナイゼナウ」に四発命中させたにすぎなかった。午後6時53分、約6,000メートルの距離でわが方は敵をかわした。敵の砲撃はこの時点でしだいにまばらになっていったが、われわれは多くの命中弾をみとめることができた。とりわけ「モンマス」では二重前楼の艦橋天蓋がなくなっており、艦橋にはひどい火災が生じているのが見られた。「シャルンホルスト」は、自艦から「グッド・ホープ」に約35発の命

中弾を与えたとみてよいと判断した。

われわれの転進にもかかわらず、さらに 4,900 メートルの距離まで近づいたので、敵は砲撃の結果に失望して魚雷発射をねらって操舵していると考えられた。6 時頃に昇った月の位置であったなら、そのような敵には有利であっただろう。そこで私は、7 時 45 分頃、先頭艦の方向転換により、艦隊を徐々に退避させた。この間にあたりは暗くなっていた。「シャルンホルスト」での距離測定は、はじめはまだ「グッド・ホープ」に発生した火災の光を基準にしていた。しかし、測定と照準、観察はしだいに不正確なものとなったので、7 時 26 分に砲撃は中止された。その前の午後 7 時 23 分に、「グッド・ホープ」の煙突のあいだに大きな火柱がみとめられた。それ以降、この艦は砲撃をやめたように思われた。「モンマス」は、すでに 7 時 20 分頃、砲撃を中止していたようである。

この間接近していたはずの「ニュルンベルク」を含む小型巡洋艦群は、午後 7 時 30 分に、敵を追撃して魚雷攻撃すべしとの無線電信による命令を受けた。このとき、雨をとまなう嵐によって見通しがきかなくなった。「グッド・ホープ」発見に成功した小型巡洋艦はなかった。しかし、「ニュルンベルク」は強く傾斜していた「モンマス」に遭遇した。はじめは前方に立ち、ついで並航し、8 時 58 分、至近距離で魚雷を撃ち込んで転覆させたが、それに至るまで砲火による反撃はなかった。しかし、「モンマス」の旗はそのときもなお翻っていた。救助作業は高波のため考えられなかった。とりわけ「ニュルンベルク」艦上では、そのすぐ後に第二の敵の煙が視認されたと思われ、そちらの方に新たな突進をはじめなければならなかった。「オトランド」は、すでに戦いのはじめに最初の命中弾を受けてから、進路を転じてどうやら高速で逃げたようである。「グラスゴー」は最も長い間砲撃を継続できたが、ただそれは命中しなかった。それからこの艦も夕闇の中を逃れた。「ライプツィヒ」と「ドレーズデン」からは、ともかくも幾度かの片舷斉射が「グラスゴー」艦上に観察されたと考えられている。

小型巡洋艦群は、戦いの中で死傷者も出ず損傷も被らなかった。「グナイゼナウ」は二名の軽傷者を出した。

艦隊の乗組員たちは、感激をもって戦いに赴いた。誰もが義務を果たし、勝利に寄与した。

完

スポーツ

今週は、ファウストバルの二次予選と決勝戦があった。予選では第1チームが第2チームに152対134で勝ち、その結果第1チームと第3チームが決勝戦に進み、その試合はこの前の火曜日におこなわれた。それは、実力伯仲の敵同士の熱戦であり、エキサイティングな試合であった。前半、第3チームは4点のリードを奪うことに成功した。しかし後半、状況は一変し、第1チームが急速に調子を取り戻し、うまく追い上げていった。結局試合の結果は、第3チームが148.5対148で勝った。

こんな試合を見たあとで言うことができるのはただ、同じような面白い試合をまたすぐに見る機会を得たいということだけである。

水曜日にはサッカーの予選が始まり、第1チームと第2チームのあいだで戦われた。しかし、残念ながら前半が終わった後やむなく中断された。しかしこの試合は数日のうちに再開されるだろう。

チェス・コーナー

(駒の略語 K = キング、D = クイーン、L = ビショップ、
S = ナイト、T = ルーク、B = ポーン)

第 37 問解答

1. K. e4 - f5 任意の手
2. D. T. S で詰み

第 38 問解答

1. L d5 - c4 Lf1 x c4
2. D a2 - a4 K d4 - d5 (d3)
3. D a4 - d7(d1) 詰み

第 38 問その他の解答

- | | |
|-------------------------|---------------------------|
| 1. Lf1 - d3 | 1. L f1 - g2 (h3) |
| 2. Lc4 - e6 c5 - c4 | 2. Da2 - b3 任意の手 |
| 3. Da2 - a7 詰み | 3. Db3 - c3 詰み |
| 1. Ld5 - f3 Kd4 - d3 | 1. c5 - c4 |
| 2. Da2-b3+ Kd3 - d2(d4) | 2. Da2 - a5 任意の手 |
| 3. Db3-d1(d5) で詰み | 3. D で詰み |
| 1. L f1 - c4 | |
| 2. D a2 - a5 任意の手 | |
| 3. D で詰み | |

正解者は、第 37 問：Jos. ヴェーバー

第 38 問：Jos. ヴェーバー、ハインリヒ・ローデ

第 39 問：

白：Kh1, Dd7, Tc3, e3, Lg6, h6, Sa5, c7, Bb4, f7, g4.

黒：Kd4, Dg5, Tb8, La7, a8, Se1, f8, Ba4, d5, f6, h2.

2手詰め。

第 40 問：

白：Dd7, Lc2, h6, Se4, e7.

黒：Ke5, Bc4.

3手詰め。

図書室

最近郵送の雑誌がここに届いたが、それらは横浜と東京のドイツ人たちがありがたいことにわれわれのために集めてくれたものだ。この機会にわれわれは、すでに以前に受け取っている雑誌類も新たに整理したが、これらはそのうちわれわれの本とまったく同様に貸し出されるだろう。この記事の後に、その正確なリストを公表する。貸出しのさいに、連載の長編小説などが入っている雑誌については、その話が完結するまでのひとまとまりの号数が貸し出されるよう、配慮がなされるだろう。これら仮綴じされただけの雑誌については、しっかり製本された書物よりもっと大事に扱う必要がある。この点に関して、図書室から最初に貸し出された諸々の雑誌については、残念ながら好ましくない結果になってしまったことが多々ある。

『月刊フェルハーゲン・ウント・クラージング』

- 1907年 2号分
- 1908年 5号分
- 1909年 3号分
- 1910年 3号分
- 1911年 5号分
- 1912年 4号分
- 1913年 8号分
- 1914年 17号分

その他、全冊揃いの年度分がわれわれの図書室で製本されたものがいくつかある。

『ノルト・ウント・ズュート（北と南）』

- 1910・11年 24号分
- 1911・12年 4号分

1912年 15号分

1913年 12号分

1914年 6号分

『アリーナ』

1914年 5号分

『クンストヴァルト』

1908年 16号分

1910年 2号分

1911年 7号分

1912年 6号分

1913年 5号分

『リテラーリッシュ・エヒヨー (文学評論)』

1911年 24号分

1912年 24号分

1913年 24号分

1914年 24号分

『テュルマー (塔守)』

1912年 2号分

1914年 9号分

『グレンツボーテン (国境便り)』

1908年 10号分

1909年 23号分

1910年 32号分

1911年 52号分

1912年 18号分

1909年 3月 13号分

1910年 8号分

1911年 20号分

1912年 90号分

1913年 12号分

『スポーツ画報』

1911年 53号分

『ダス・エヒヨー』

1911年 52号分

1912年 62号分

1913年 52号分

1914年 25号分

『ドイツ植民地新聞』

1911年 52号分

1912年 41号分

1913年 52号分

1914年 20号分

『ルスティゲ・ブレッター（面白草子）』

1911年 48号分

1912年 41号分

『ザ・グラフィック』

1911年 27号分

『ザ・スタジオ』

1912年 9号分

『ライフ』

21号分

音 楽

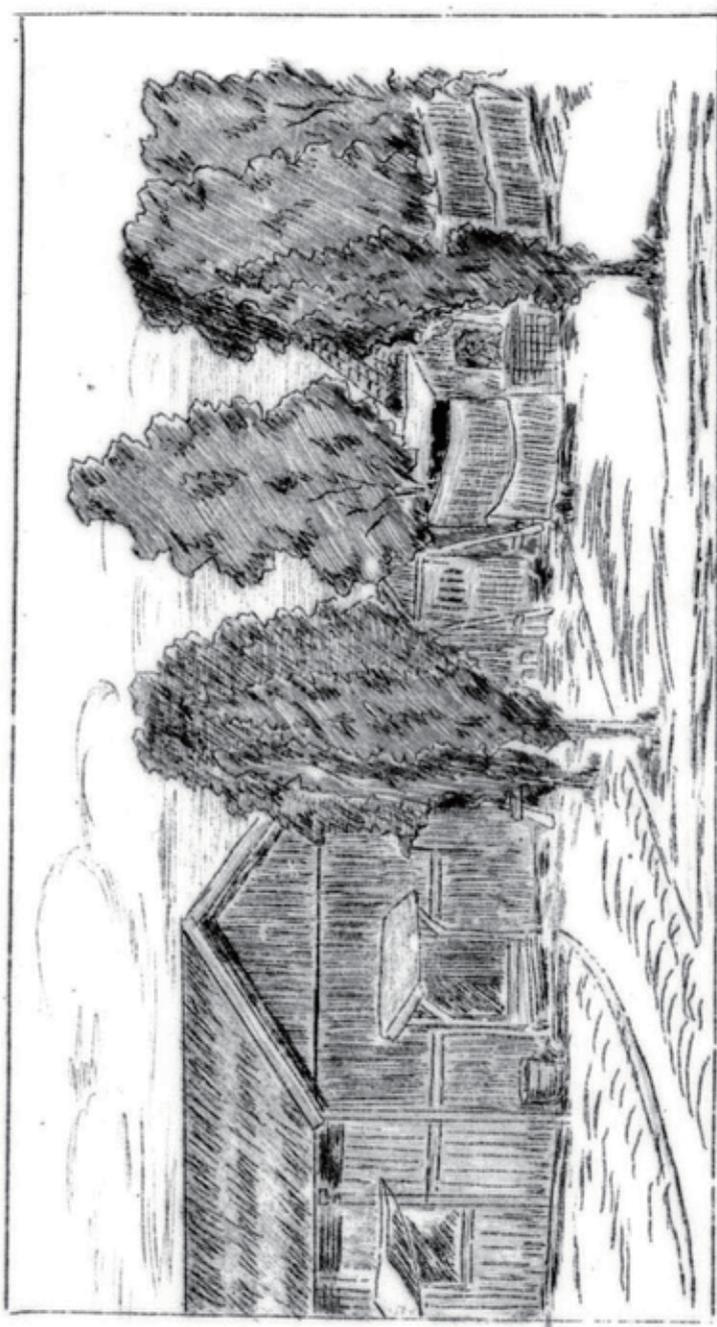
非常に歓迎すべき贈り物が、最近ジーマンス・シュッケルト社からわれわれに寄付された。2冊の分厚い軍歌集で、陸軍省により編集・出版されたものだ。われらの合唱団は、この愛すべき贈り物を特に感謝して受け取るだろう。

プログラム

- 1) 『プロイセン行進曲』
- 2) 二つの民謡
 - a) 『さよなら、静かな小路よ』
 - b) 『大切な故郷』
- 3) 『人生はやはりすばらしい』 エドゥアルト・シュトラウス
- 4) 「乙女らは天使のよう」 ジルベール
オペレッタ『40日間世界旅行』より
- 5) 『小さなおもちゃの兵隊』 笛のカプリース ロージー

「エムデン」上陸隊体験記（8）

あとで聞いてはっきりわかったことだが、アラブ人たちはイギリス人に買収されていた。彼らは、いつどこにわれわれが来るかを知っていて、準備万端整えていたのだ。ここでまずおこなったのは次のようなことだ。われわれは水辺に駆け出して行き、それから野営地を引き払ったが、自分たちでラクダに手綱をつけなければならなかった。というのも、戦いが始まるとすぐにラクダの御者たちは逃げてしまったからだ。30頭以上のラクダ



その5

収容所の情景

は死んでいた。鞍はうまく合わず、私の部下たちは帆を上げることはできてもラクダの扱いは知らなかった。運搬用の動物が足りないため、多くの荷物を砂上に置き去りにした。

それからわれわれはトルコ軍にしっかり守られて、無事にジッダに着いた。そこではさまざまな役所や住民たちがわれわれを歓迎してくれた。そこから 19 日間、無事に帆船でエルヴェシュまで行き、ズーリマン・パシャの十分な護衛のもと 5 日間のキャラヴァンの旅でエルーラに至った。今われわれはようやく鉄道に乗ってドイツに …… そしてやっと戦争にもどれるのだ。

私は尋ねた。「これまではまだ戦争ではなかったというのですか。」

「そのとおり」と一番若い少尉が言った。「『エムデン』はずっと敵船拿捕しかしていない。一度だけペナンで戦闘があったが、そのとき私はいなかった。これが戦争だって？いや、われわれにとって戦争は今やっと始まることになる。」

「私の任務は 11 月以来」とミュッケはいった。「部下たちをできるだけ早くドイツに行かせて敵と戦わせることだった。今ようやくそれができるのだ。」

「で、ご自分のためには何がお望みですか」と尋ねた。

「私が望むのは」一彼は笑い、青い目が輝いた。「北海での戦闘命令だ。」

「エムデン」の幸運と終末

(『ベルリーナー・ターゲブラット』より)

マーン・オアシス ダマスクス南方 620km 5 月 9 日

アラビアを抜けてゆく途中、「エムデン」の将校で二人だけ残ったフォン・ミュッケとギュスリング少尉は、次のように語った。

われわれは8月11日に巡洋艦部隊から離れ、給炭船「マルコマンニア」だけが同行することになったが、そのとき行先は決めていなかった。航海の途中、「エムデン」はドイツ船から三人の高級船員を引き取った。これは好都合な偶然だった。というのも、のちにわれわれは何隻かの汽船を拿捕し、沈めるさいに、またこれらの汽船を同行させたときに監視役として、彼らを大いに用いたからである。スマトラからコロンボを経てカルカットまで、われわれは何にも出会わなかった。12月10日に最初の小舟が視界に入ってきた。われわれはこれを停止させた。それは「ポンテポルス」で、イギリスにチャーターされたギリシア船だった。翌日、「インダス」に出会った。これはボンベイ〔ムンバイ〕に向かう途中で、兵員輸送のための設備が十分に整えられていたが、まだ部隊を載せていなかった。この船は、われわれが沈めた最初の船となった。その乗組員は「マルコマンニア」に移らせた。「艦名は何というのですか」と高級船員たちが訪ねた。「『エムデン』だって？ありえない。とっくの昔に撃沈されたじゃないですか。」われわれは兵員輸送船「ロヴァット」を沈め、「コービンガ」を同行させた。ひとは新しい仕事にもすぐに慣れるものだ。数日後にはもう、敵船拿捕が任務の一部になっていた。われわれが拿捕した23隻のうち、ほとんどの船は最初の信号で停止した。そうでなかったときは空砲を撃った。すると船は皆止まった。ただ一隻「クラン・マッテセン」だけは、多くの自動車と機関車を海中投棄しようとして、空砲よりも強烈な一撃を船首にくらうことになった。たいていの場合、拿捕された船の高級船員たちは非常に礼儀正しく、はしごを降ろしてくれた。

つづく



侮辱された水上警察

アザラシ：なんてこった。ここはおれが取り仕切っているの、命令をせねばならん。あのドイツ人のやつらが、ここでさえUボートを使っていい加減なことをしやがるから。





ドイツの前進

迫りくる黒雲とともに国中が
嵐のようにざわめいている。
荒れ狂う襲来は何物も持ちこたえられぬ。
敵が支えるべきものは、倒される。

大急ぎでしりぞくがよい。
鉄の箒に掃き散らされるから。
柵を立てて逆らってもとどめられぬ
昔もそうだったではないか。

こうして敵国での進軍は続く。
力強く巨人の歩みのように。
勝利に至る戦いによって祖国に
名誉ある平和は勝ち取られる。



陽気な三人組！

凧

夕べに風が吹いていると
凧が空に舞うのが見える。
われらの国の秋と同じように
この国でも凧を飛ばしている。
ここにこんな気晴らしが見つかるや
さっそく凧がつくられた。

今では暇つぶしと楽しみのため
収容所でも凧を飛ばしている。

